実践発表

在籍学級で自己実現できるための国際室での特別の教育課程実施の工夫
―兼務する公立小中学校での２年間の実践事例―

生田佳澄（静岡県沼津市立今沢小学校・今沢中学校）

１．実践の場の特徴

国際室主任教諭として小中学校で日本語指導をしている。学習指導部に属し、研修推進部と連携しながら小中合同研修の企画・運営に関わる立場でもある。勤務校の小中学校は、隣接しているので、小中国際室交流授業や教職員合同研修の開催がしやすい。在籍児童生徒のルーツは、中学校区で19カ国にわたる。小学校では週３日、中学校では週２日国際室を開く。参加者は、小学校17人中学校12人である。小中学校ともに、年度途中の転出や転入、来日に伴う編入がある。Culturally and Linguistically Diverse Children(以下CLD児）は、小中学校全体で46人いる。多文化共生のニーズの高い地域である。2024年度から新設されたこの国際室の名称は、小中学校共にUmi（うみ）である。海のように広くて深い子どもの可能性を共に探る場所という、CLD児と共に学ぶ全ての子どもを包摂する願いが込められている。

２．実践の目標

国際室を学校全体に開かれた学びの場として再設計し、特別の教育課程を通して多文化の子どもが在籍学級で自己実現していく過程を示す。

３．具体的な実践の内容とその過程

齋藤(2009）によるとJSLカリキュラムの方法論の背景には「子どもたちが、教室で学んだことを、社会的な文脈の中で自己実現するための力として育むという理念がある。(p.48)」とある。子供にとってのウェルビーングは、在籍学級で自己実現できることでもあると解釈し、そのため国際教室を孤立した教室としない工夫をした。

3.1 学校や教職員に対する実践

管理職が小中グランドデザインや学校経営書に Umi（国際室）を明確に位置付け、教務主任が時間割や職員会議の順位付けを確定することで、教職員の意識が変容し組織的取組がしやすくなった。小中管理職間、教務主任間の連携により、国際室担当不在時であっても組織的な工夫がとられるようになった。小中 Umi 連絡協議会で関係者が一同に会するのは難しいが、日常の組織を活性化することで社会に開かれた教育課程等を計画的に実現できた。「特別の教育課程」の教職員・保護者への啓もうは、学校長が前述のグランドデザインや学校経営方針、学校だより、ホームページを通して効果的に実施した。国際室担当は、学習指導部の提案・確認事項として年度当初の職員会議の資料をデジタル化し文科省の関連ページ等とリンクさせながら短時間で伝達講習した。学校ホームページに学校長が掲載をした「Umiちゃんねる」（リンク集）はCLD児の日本語学習活用だけでなく、日本語支援者と教材共有が可能になった。小中９カ年の児童生徒の学びの連続性を鑑み、兼務する小中学校の全職員参加の Umi 合同研修会を研修部と開催し実践的に授業研究した。国際室担当は、ファシリテーターに徹し、小中学校の多くの教職員が自身の事例を語り合う場を重視した。小中教職員の関係性が向上し、学校文化間の溝が埋まってきた。

企業助成事業は、教育の可能性を拡げた。経済的な教育支援によりモノ・人・事が充実した。

3.2 児童生徒に対する実践

在籍学級と Umi（国際室）での児童生徒の様相は異なる。Umi でどんなに自己実現ができていても、在籍学級との親和性がない学習は、在籍学級で自己実現することにはつながりにくい。

そこで、在籍学級での自己実現へ向けた次のプロセスを実践したところ、効果が見られた。

① DLA による実態把握をした。日本語の力・母語の力・家庭生活や学校生活における対象 CLD 児の強みを知る機会として活用した。トランスランゲージング・クラスルームを学級や学校全体に広げた。緩やかではあるが確実に多文化共生の基盤形成につながっている。

② 在籍学級・委員会・クラブ・部活動等における短時間「入り込み」による CLD 児の実態把握をした。活動内容の目的を把握した上で対象 CLD 児が何に夢中になり、誰とどんなかかわりをしているのかを知り、どんな支援を要するのかを検討する根拠に据えた。

③ Umi（国際室）の学習環境整備をした。言葉との出会いを生む体験・視覚支援・リアルな学びの充実を図り全ての子どもの学びの場とした。国際室の教育ブランディング効果を生んだ。

④ 明確なゴール指標の設定をした。担任や担当と話し、在籍学級の授業のどの場面で CLD 児が自己実現を図る発表をするのか、カリキュラムマネジメントし単元を共に構想し実現に立ち会った。時空間を流動的に捉えた他者参照、「入り込み」の先の合同授業の実施は、より大勢の前での自己実現の機会を増やした。対象児は、果敢に挑戦し自信や意欲を創出した。

４．結果と考察

Umi NEWS の番組制作に自主的に参加した小学校６年生Ａの感想を紹介する。「Umi（国際室）ができる前は、孤立しがちな外国籍の同級生が、Umi ができてから Umi の友達と打ち解け合うようになってきたと思います。孤立していた時は、自分もどう声をかけたらいいのか迷うばかりで行動できなかったのです。去年の２学期頃から〇〇さんたちが Umi で勉強したことをクラスで楽しそうに伝えるようになってきた姿を見て、（自分はどうなんだろう。）と、自分を見つめるきっかけになりました。『Umi は、みんなの Umi』というキャッチフレーズのもと、自分たちも合同 Umi の授業を楽しんだり、休み時間に Umi で過ごしたりすることを通して多様性に対する考えが深まってきただけでなく、（Umi　NEWS 参加のように）一歩踏み出す行動力が自分についてきたと思います。世界平和についても考えて「みらいポスト(KWN2025)」で一緒に発信することができたことも自分の誇りです。」

若手教員の感想を紹介する。「異動前の学校では、国際室がなかったので支援方法を相談できず困っていた。授業で外国ルーツの子どもを活躍させてあげられていなかった。今年は、子どもが活躍できる場をイメージしながら授業計画するようになった。授業では Umi で学んだ子どもが Umi でまとめたものを自主的にプレゼンする場面もあった。クラスの他の子どもたちにとっても新たな学びの視点を得られた。自分の授業自体が変わってきた。」

組織的な支援体制の構築により CLD 児が安心して在籍学級で自己実現できる機会が増えた。CLD 児と共に学ぶ子どもの意識変容や授業者である在籍学級担任の授業改善にもつながった。

【引用文献】

齋藤ひろみ(2009)「文化間移動をする子どもたちへの教育の方法」齋藤ひろみ・佐藤郡衛編『文化間移動をする子どもたちの学びー教育コミュニティーの創造に向けてー』ひつじ書房.

小学生・中学生・高校生の子どもたちを対象とした映像制作支援プログラムキッド・ウィットネス・ニュース(KWN)日本(2025) Umi IMAZAWA 小編「みらいポスト」Panasonic　Group https://holdings.panasonic/jp/corporate/sustainability/citizenship/kwn/jp_contest2025.html